

私たちの 思い出の場所

ぱぶ茶屋 次男坊

住吉・浦上地区の郷土料理 豚の盛り合わせを肴に一杯!

※お話は由美子さんにお聞きしました。

「家乃屋」という義母が営んでいた食堂を受け継いで、夫が居酒屋を開いたのが昭和56年7月31日。「次男坊」の始まりです。翌年私が嫁いで来てからは、夫婦二人三脚で店を切り盛りするようになりました。常連客の中には、長崎大学の先生方や職員の皆さんもたくさんいらっしゃいます。特に環境科学部を退職された名誉教授の上江田一雄先生は、仕事帰りに毎日立ち寄ってくださる方の一人でした。カウンターに座って一杯飲んで帰宅されていたので、キープしたボトルの総数は100本以上になりました。先生が大学を退職される際には、顔



豚の盛り合わせは家乃屋の時代から続く看板メニュー。二番目のおすすめはもつ鍋です。

なじみの常連さんや元アルバイト生を呼んでお祝いの会を開いたんですよ。

当店一番のおすすめメニューは、上江田先生も好んで召し上がっていた「豚の盛り合わせ」です。豚の頭の部分を長時間塩ゆでし、スライスしたシンプルな料理ですが、住吉・浦上地区で昔から食べられている郷土料理でもあります。大学内でお酒を飲むのが許されていた時代には、テイクアウトされる職員さんもいらっしゃいました。

長崎大学の学生さんには、代々アルバイトを頑張ってもらっています。当初は水産学部の学生さんが多かったのですが、いつ頃からか教育学部、そして今は工学部の学生さんが不思議と多いですね。中には、たまたま来店していた企業の方に働きぶりが認められ、リクルートされて就職された学生さんもいました。皆さんには楽しく働いてもらいたいので、誕生日会やお花見、海水浴、忘年会など交流する場を設けています。卒業後も次男坊ファミリーであることに変わりありません。年賀状が届いたり、旅先で連絡を取り

合って食事をしたり仲良くしています。

夫と二人で店を営んで44年。結婚前に幼稚園の先生をしていた私は、酔ったお客様は子どもと一緒にだと思いながら接してきました。そうすると仕事が楽しくて、今ではすっかり生きがいになっています。卒業生の皆さん、名物の豚の盛り合わせをぜひ食べていらしてください。そして、大学時代を懐かしんでいただくと嬉しいです。

片岡拓州さん

由美子さん

思い出の場所
募集中!



木造の風情ある佇まいだった旧店舗。平成18年12月8日に現在のビルが完成。1階に再オープンしました。



アルバイト生が選任を祝ってくれました。

アンケートのご協力をお願い

以下を明記の上、広報紙Chohoへのご意見・ご感想をお寄せください。

- ①面白かった記事
- ②本紙に対するご意見・ご感想
- ③今後取り扱ってほしい内容
- ④長崎大学からの情報発信全般についてのご意見・ご感想
- ⑤本学との関係
- ⑥年齢
- ⑦氏名(ふりがな)
- ⑧郵便番号
- ⑨住所
- ⑩電話番号



◎はがき：〒852-8521 長崎市文教町1-14 長崎大学広報戦略本部 宛て

◎FAX：095-819-2156 ◎メール：kouhou@ml.nagasaki-u.ac.jp

◎募集期間：2026年7月末まで

読者プレゼント

アンケートにご協力いただいた皆さまの中から、抽選で10名様に、長崎大学オリジナルQUOカード(500円分)をプレゼントします。賞品の発送は2026年8月を予定しています。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。



長崎大学SNSサイト



X



Facebook



Instagram



YouTube

Choho

直接送付サービス

受付中!



広報紙Chohoはその多くを、各学部同窓会様の会報誌送付の際に、直近の号のみ同封してお送りしています。そのため、読者の皆さまには必ずしも毎号お届けできないケースがあり、「前号も読みたい」、「定期送付をしてほしい」といったお声をいただいております。そこで、ご指定の住所へChohoを直送するサービスを行っています。

上記サイトへアクセスしていただき、ご登録をお願いいたします。皆さまのご利用をお待ちしております。

送付先変更のご連絡はこちらまで



編集後記

表紙の写真は、取材に訪れた12月に伝承館そばの郡山海岸の堤防から撮影したものです。快晴の空のもと、穏やかで静かな海がどこまでも広がっていました。

震災から15年が経ち、あの時何が起きていたのか、なぜ長崎大学が福島支援なのか、知らない世代も増えています。原爆による壊滅的な被害を受けた時から積み上げてきた被ばく医療や放射線研究の知見を、チヨルノーベリ原発事故の現場対応で生かしてきた長崎大学。2011年の震災直後にいち早く支援に駆け付けたのも当然の行動でした。痛みを知っているからこそ、長崎大学は常に被災者に寄り添いながら、福島の地に根差し、支援の幅を広げてきたのです。

起きてしまった災害は取り返しがつきませんが、いかに被害拡大を抑え、将来の防災・減災につなげていくかは、大学というアカデミアに与えられた重要な役割であり、使命です。今回の取材を通じて、福島の支援のバトンが、震災を知らない次の世代の研究者や学生たちへ、確かに受け継がれていることを確信しました。本号が読者の皆さまにとっても、福島のこれからの考える一助となりましたら幸いです。

(広報戦略課 山本祐美子)